

News Letter

Graduate School of Education



リカレント教育講座

巻頭言

2

佐藤 卓己 副研究科長

研究ノート

3

- [教員から] 福井 佑介 教育社会学講座 准教授
- [院生から] 松田 康介 博士後期課程1回生
- [社会人院生から] 木下 和真 修士課程2回生
- [留学生から] 肖 瑤 修士課程2回生

活動報告

5

- [附属臨床教育実践研究センターから]
田中 康裕 附属臨床教育実践研究センター長
- [教育実践コラボレーション・センターから]
開沼 太郎 教育社会学講座 准教授
- [グローバル教育展開オフィスから]
高山 敬太 グローバル教育展開オフィス 室長

E.FORUMの取り組み

6

石井 英真 教育・人間科学講座 准教授

トピックス

7

「日本型」教育文化・知の継承支援モデルの構築と展開プロジェクト

MANALO, Emmanuel 教育認知心理学講座 教授

令和4年度教育学研究科長賞

8

受賞者 油田 優衣 修士課程2回生

Araya Orozco Claudia 博士課程3回生

オープンキャンパス2022

9

大学院・学部学士入学 入試説明会

諸記録

10

- 主な出来事 (2022.4.1 ~ 2022.10.31)
- 人事異動 (2022.5.1 ~ 2022.10.31)
- 外部資金受入れ (2022.4.1 ~ 2022.9.30)

諸報

11

新任教員紹介

教育学研究科・教育学部基金

12



京都大学 大学院教育学研究科ロゴマーク

このロゴマークは、京都大学学術情報メディアセンターの元客員教授・奥村昭夫先生のデザインです。奥村先生は、ロート製菓、グリコ、牛乳石鹸などのロゴマークやパッケージなどを手がけた著名グラフィックデザイナーです。本研究科・学部の「育ち」「つながり」「先端」といったキーコンセプトをもとに、教育学部本館の正面玄関を見守るクスノキの葉をモチーフとし、緑のグラデーションで成長の変化、中央の空間でこれから生まれてくるものを表わし、全体として両手で優しく包み込むイメージのデザインとなっています。

京都大学は2022年で創立125周年を迎えた。この原稿を書きながら、11月5日に時計台記念館百周年記念ホールで行われる「創立125周年特別シンポジウム」の準備をしている。渉外担当の理事補として、パネルディスカッション「社会が求める人材像について」で司会をつとめるためだ。

教育学研究科の教員としては、部局のディプロマ・ポリシーから外れたことは発言できない。さっそくウェブで検索してみた。「京都大学／教育学／ディプロマ」でググると、すぐヒットし、京都大学の各研究科ディプロマ・ポリシーも一覧できる。

「人間とは何か、人間にとっての教育とは何か」を、それぞれの専門領域を基本としつつ学際的に、また心、人間、社会をつなぐ「科学知」と、社会における「実践知」を融合させて探究することで、「実践的叡智“フロネシス”」を身につけた、国際水準の研究者や実践的指導者、または未来の教育をデザインしうる教育イノベーターとして国内外で活躍できる人材を育成します。」

そこには「実践的叡智」として、哲学者アリストテレスが古代アテネの政治家ペリクレスをモデルに提唱したフロネシス(phronesis)が登場している。古代史にも古典哲学にあまり関心がない私だが、「科学知」エピステーメと「実践知」テクネの総合としてのフロネシスという概念は知っている。「実践的叡智」よりもわかりやすく、「バランス感覚や実行力をもった達人の知恵」と説明した方がよいのかもしれない。

かつて国際日本文化研究センター(日文研)の共同研究「近代日本における指導者像と指導者論」に参加し、そのとき野中郁次郎「チャーチルにみる『危機のリーダーシップ』——フロネシスの視点から」の報告を聞いた。野中はフロニモス(フロネシスをもつ人)が持つ六つの能力を挙げている。

①善い目的をつくる能力 ②ありのままの現実を直観する能力 ③場をタイムリーにつくる能力 ④直観した本質を物語化する能力 ⑤物語を実現する政治力 ⑥実践知を組織化する能力

この条件をヒトラーと戦った英首相チャーチルを例に論じている。チャーチルは民主主義という公共善を守るため対ドイツ戦を断固決意し(①)、頻繁に現場に足を運んで対話し(②)、国民から「見える首相」であることに気をくばり、共感のための場づくりに長けていた(③)。歴史という大きな物語に自分を位置付けることを決して怠らず(④)、みずから国防相を兼務しつつ(⑤)、人材抜擢にも余念がなかった(⑥)。

さらに野中は哲学者アイザック・バーリンのチャーチル論を引いて、こうしたフロネティック・リーダーが生まれる必要



条件として歴史的構想力historical imaginationの保持を指摘する。

「歴史の中に身を置きながら、事象の背後にある歴史的な文脈を水平、垂直に読み解き、その都度、最適最善な判断を行う。そのジャッジメントの根底に歴史的想像力があつた。」

この野中論文が収録されている戸部良一編『近代日本のリーダーシップ——岐路に立つ指導者たち』(千倉書房・2014年)には、拙稿「管制高地に立つ編集者・吉野源三郎——平和運動における軍事的リーダーシップ」も入っている。管制高地commanding heightはその戦場を支配できるような戦略的高地を指す軍事用語である。政治学者・藤田省三の「戦後精神の管制高地——吉野源三郎氏の姿」(『みずず』1981年6月号)から採用した言葉だ。藤田は「私たちの側の論陣」、すなわち戦後民主主義の総合雑誌『世界』を構築した吉野の立ち位置を管制高地とみなし、こう論じている。

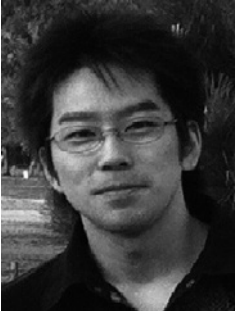
「調査と熟考の上に立つ不退転の『意志』、を中心に持った知・情・意の三位一体が完璧な形態を備えて進軍する姿、そこに吉野源三郎が在った。」

藤田は予備役の砲兵少尉だった吉野源三郎にフロニモスの理想を見ていた。実際、吉野には軍事的レトリックを使って戦後平和運動の戦略を論じた論文も少なくない。それにしても、いまの学生が読む吉野の著作といえば、せいぜい『君たちはどう生きるか』だけかもしれない。しかし、その岩波文庫版の冒頭、コペル君と叔父さんが銀座のデパート屋上から群衆を見下ろすシーンなどに管制高地からのまなざし、そこから生まれるフロネシスがあちこちで確認できる。

教育学から遠い学問領域にいる私だが、こうした「フロネシスを身に付けた人材」育成を謳う本研究科のディプロマ・ポリシーは本当に素晴らしいと思う。もっとも、われこそはフロニモスだとは到底言えず、教師としてはなほだ決まりが悪い次第ではあるけれども。

教員から

「図書館」現象の歴史と現状に向けて



教育社会学講座
准教授

福井 佑介

本研究科に教員としてお世話になって、早くも8年目である。私が専門としている図書館情報学は、情報の生成、流通、保存、消費を広く扱う領域である（決して、図書館の運営や司書の資格のための分野にとどまるものではない）。それらの情報のあり方は、情報社会といわれる「現在」でこそ意識されやすいが、歴史的にみれば、「図書館」が多くの部分を担っていた。もちろん、書籍館や、

文庫、Library、Bibliothecaなど、名称や実態は様々であったが、ここでは便宜的に「図書館」とする。

ネットの発達以前に調べ物をするを思い浮かべると、書店でその時に販売されている資料を入手して目を通すこともできたが、様々な資料や情報を広く渉猟するには「図書館」に行くほかなかった。もっと時代を遡れば、「図書館」で情報にア

クセスすること自体が、ある種の特権を前提としていた。このように考えると、「現在」というのは、ウェブ（あるいは検索エンジン）の存在により、人類史上、最も調べ物のハードルが低い、「新しい」時代である。その「新しい」時代に対して連続性を語り得る領域こそ、情報を蓄積し、組織化し、保存し、利用に供してきた「図書館」現象の歴史だと考えている。

「図書館」の歴史と現状を大きな視野で研究してきた本学の図書館情報学の伝統を引き継ぎ、私の研究の柱の一つも図書館史研究である。特に規範の観点から戦後の図書館史を扱っている。利用者が情報にアクセスする権利を図書館が保障しようとする図書館思想の展開を明らかにするところから研究を始めた。図書館の中立性や社会的責任の研究に進み、社会的な動向や価値観との調和や葛藤の中で、図書館関係者が図書館をどう位置付けてきたのかをみてきた。文化擁護の機関、知識の社会保障機関、知る自由の保障などの語で象徴されてきた「図書館」の展開を念頭に置きながら、「現在」における情報のあり方及び「図書館」の公共性や広義の教育性も考えていきたい。

院生から

言葉の重力

教育社会学講座
博士後期課程1回生
松田 康介

文章を書くのに時間がかかってしまう。たとえば日々のメール連絡だと、文面を作成するまで（書き出さないと）・作成中（言葉がまとまらない）・作成してから（読み返して）・送信後（ここはこうすべきだった）、と五月雨式に体力を消費する。いつもではないけれど。メールにしてもより長めの文章にしても、伝えたい情報がこぼれ落ちるのを「気にしすぎ」と言えばそれまでで……葛藤を無効化する「気にしすぎ」をむやみに使うことは避けたいが、自分自身についてはそのように感じる。情報伝達の純化を目指すよりも、まずはコミュニケーションを進めておくことが優先されるべきなのかもしれない。密度よりも持続時間。

といったようなことが頭に浮かぶきっかけとなったのは、上に述べてきた「日本語の書き言葉」ではなく「英語の話し言葉」である。2～3年前から留学生向けの授業や海外学生と京大生との学習・交流プログラムにアシスタントとして

参加していて、英語運用能力の不足から口がうまく回らないながらも、次第になんとかは相手と通じ合えるようになるのを実感することが多々あった。時間と、それによって導かれた信頼と、適度な遊び（隙間）としてのディスコミュニケーションとが意思疎通を促進するのではないだろうか。アンサンブルの妙みたいだ、とも思う。

短詩や標語、キャッチコピーなどの短い表現が人の心に強く響くということ、また短い表現のそうした性質が社会において広く認識され実際に様々な場面で活用されているという現象に関心がある。これまでは、「短歌」の解釈される仕方に関してジェンダーの視点から研究を進めてきた。切り詰められた言葉に見出されるポエジーは読み手の解釈に支えられ、まさに対話が展開されるその場面において女性性／男性性という情報、あるいは枠組みが作品の評価に滑り込む。短い表現をめぐるポリティクスは、警句的な即効性だけではなく時間と共に堆積していく歴史性をも帯びている。

社会人院生から

そろばんは方言？



教育認知心理学講座
修士課程2回生

木下 和真

世界中で使われているアラビア数字が英語にあたるとすれば、そろばんは方言のようなもの、以前から私はこのように考えていた。例えば3という概念を表すとき、一般的にはアラビア数字で「3」と表す。しかし、漢数字で「三」とも、ローマ数字で「III」とも表せる。そろばんで一珠を3つ上げても、それは3だ。これは、異なる外国語で3を表現できることに似ている。

日本語では「さん」英語なら「three」フランス語なら「trois」となり、言語によって異なることは誰もが知っている。このように考えると、数の表記として世界中で使用されているアラビア数字は、いわば世界の共通言語。例えたと英語に当たるだろう。そう考えると、そろばんは東アジアの人々が使用している一つの方言のようなもの、というのが

私の考えである。

昨年度より、私は京都大学で大学院生として認知心理学の観点からそろばん研究を行っている。以前の環境では、「そろばんは方言だ」と力説したところで「ふうん」の一言で話が終わるのがほとんどだった。しかし、大学院に進学することでこのような話を堂々とできるようになった。面白いと言ってもらえることもある。夕方からは、そろばん教室の先生として子どもたちを指導している。教室はまさに実践の場で、子どもたちの間違いから研究のアイデアが湧くことも多い。

世界に目を向けるとそろばん学習は中東やアフリカを中心に急速な広がりを見せている。中国を筆頭に、国際論文の出版も増えている。しかしながら、日本からの国際論文は近年ゼロに近い。方言の良さや温もりが方言話者には気付きにくいように、日本ではそろばんの存在が当たり前すぎるのかもしれない。しかし、そこには必ず宝が埋もれているはずだ。そろばんに関わる一人として、そのような宝を発見し、世界に発信できる研究を行っていきたい。

留学生から

すべての子どもに適切な「養分」を



教育・人間科学講座
修士課程2回生

肖 瑶

「肖さんの専門は何ですか」と初対面の人に聞かれて、「教育学です」と答えると、いつも返してくるのは「そうか、肖さんは先生になりたいんですね」という反応である。教師として学校現場で子どもの成長を見守るのはもちろん素晴らしい仕事であるが、研究者として教育学という学問に自分なりの知見を貢献したい私は、どのように自分の研究内

容をわかりやすく伝えたら良いのか、悩み続けていた。

私の母はお花を育てるのが好きである。パンジー、ビオラの場合、鉢土が乾いたら午前中にたっぷり水やりをする必要があるが、多肉植物だと夏は月に数回、冬は月に一回程度水やりを行えばよい。また、お花の種類によって肥料を施す時期とやり方も異なる。「一つ一つのお花を大切に、適

切な養分を与えれば最も美しく咲くよ」といつも母が言う。

なるほど、このようなお花の育て方は、まさに自分の研究の根底にある問題意識にも当てはまるのではないかと気づいた。受験競争の激しい中国では、中学校、高校、さらに大学の選抜試験に勝つために、知識を効率よく詰め込める一斉画一授業が多くの学校で行われている。自分もこのような形式の授業を受けてきて、様々なテストで戦ってきた一人であった。このような硝煙のない戦場で、勝利の栄光に輝いた人もいれば、「落ちこぼれ」で心が折れた人もいる。

だが、子ども一人ひとり異なるのである。子どもの個人差を看過しがちな一斉画一授業でなく、子どもの学力、学習適性や興味・関心に柔軟に対応できるように、教師がどのように指導し、カリキュラムがどのように編成され、どのような教材が相応しいのかなど、すべての子どもに適切な「養分」を与える教育のあり方を研究していきたい。教師が学校生活の文脈に根ざして発した声に耳を傾け、教師とともに教育を創出することに尽力したいと考えている。

附属臨床教育実践研究センターから

附属臨床教育実践研究センターの活動

臨床心理学講座 教授
附属臨床教育実践研究センター長
田中 康裕



今年で開設26年目となる臨床教育実践研究センターは、開設以来一貫して、市民に開かれた心理教育相談室での心理臨床実践を中心に活動して参りました。心理臨床実践活動においては、スタッフ一人ひとりが目の前にいる来談者に真摯に向き合いながら、同時に心理教育相談室という場のあり方についても細やかに考えながら、心理教育相談室での相談活動にあたっています。また、そうした臨床実践に根差した知を社会に還元する活動として、毎年「リカレント教育講座」と「公開講座」を開催しています。

今年度は3年ぶりに7月に第24回リカレント教育講座を開催することができました。「思春期とSNS」をテーマとした今回は、SNSカウンセリングやゲーム依存・ネット依存に造詣の深い2名の先生方をシンポジストに迎え、多角的な視点からお話しいただきました。当日は学校教諭や臨床心理士など約80名の方々にご参加いただき、活発な議論がなされました。

また9月より3ヶ月間、サイモンフレイザー大学のロジャー・

フリー先生に客員教授としてお越しいただき、精神分析と社会・文化との関連、歴史的なトラウマに関する講義や臨床事例の検討などの面でご指導をいただいています。11月には「社会的精神分析に向けて」と題した公開講座の開催を予定しており、すでに多くの方から申込みをいただいています。

また東日本大震災以降、当センターでは「こころの支援室」を開設し、震災に関連して関西圏に避難・移住されてきた子育て世帯への支援活動を継続してきました。2020年以降はCOVID-19の影響により残念ながら活動を休止せざるを得ない状況が続きましたが、震災から時間が経つにつれて、参加者の方々が抱えておられる困難の形も個別化してきていることが予想されます。当事者の現在のニーズを丁寧に探りながら、またこれまでの参加者同士のつながりやスタッフとのつながりを大切にしながら、今後の活動のあり方を検討していきたいと考えております。

教育実践コラボレーション・センターから

教育実践コラボレーション・センターと「知的コラボの会」

教育社会学講座 准教授
開沼 太郎



教育実践コラボレーション・センターでは年に数回、異分野・異領域の先生方との勉強会として「知的コラボの会」を開催しています。2013年の第1回から2022年7月までにあわせて46回を数えるまでに至っております。私が担当させていただいた第40回(2021年7月実施)では「STEAM教育の展開とカリキュラム・マネジメント」というテーマで、大阪大谷大学STEAM Labのスタッフとコラボさせていただく形で教科等横断的な学びについて意見交換をさせていただきました。

この成果をもとに、今年度から日本学術振興会による科学研究費助成事業(科研費)として「STEAM教育を軸としたカリキュラム・マネジメントの推進にむけた教員の力量開発」というテーマで現場の先生方と連携しながら研究活動を進めております。私が専門としている教育行政学の領域でも、学校のガバナンスや校長のリーダーシップ、チーム学校や小学校における教科担任制の推進など、専門性や適性に応じた役割分化

と相互の協力体制づくりが求められる中で、教科等横断的な学びや学年間・学校間の連携をはじめとした教育課程全体を見通したカリキュラム・マネジメントの重要性や難しさが現場でも顕在化しています。また、文理横断・融合の観点からSTEAM教育の必要性に関する認識も広がりつつあり、教員研修のテーマなどでもよく目にするようになりました。今年度はGIGAスクール構想に伴って導入されたICT環境を効果的に活用しながら、小学校等での実践をもとに、デジタルとアナログの融合(併用や使い分けなど)や、授業と休み時間との接続性のような「つながり」を意識した工夫について、学級経営・学年全体での調整・学校全体の教育計画への位置づけといった各層にどのように組み込んでいくべきか検討しています。今後も様々な形で「コラボ」の重要性を認識しつつ、活動に携わっていく所存です。

3人娘から学ぶ研究者と父としての悩み

グローバル教育展開オフィス 室長
高山 敬太



私には3人の娘がおります。オーストラリアで10代になるまで育ち、3年前に私の京都大学での赴任に合わせて、初めて日本に「移住」しました。オーストラリアでは日本人が少ない町に住んでいましたので、当然、日本語の補習校などはありませんでした。地元の学校に通って、地元の子どもたちと同じように育ち、その土地の訛りの強いオーストラリア英語を話し、家では両親は日本語で話しかけるものの、返事はすべて英語で返す、といった毎日を過ごしていました。日本に移住してからは、言葉の面に限らず、さまざまなことで葛藤を経験していたようですが、3年も経つと、すっかり慣れてしまい、今では京都弁をごく普通に話しています。日本語は京都弁、英語はオーストラリア訛りというちょっと変わったバイリンガルです。

帰国以来、娘たちから学校での経験について聞くことが、私にとってのかけがえのない学びの機会となっています。彼女たちは、常にオーストラリアの学校を基準にして日本の学校を観察しています。その視点が、日本の学校教育を受けて育った私にはとても新鮮に映ります。ある時、中学3年生だった次女が面白いことを言っていました。日本の学校は何をどれだけ勉強すれば、どれだけの成績が取れるのかははっきりしているけど、オーストラリアではそれがはっきりしていないと。確かに、日本では、試験範囲というものが決まっています。範囲内の教科書の内容を把握(暗記)しておけば、それなりの得点を想定することが出来ます。対照的にオーストラリアでは、教科書も必ずしもあるとは限らず、しかも課題が色々な形で出てきます。あるトピックについて、レポートを書いてもいいし、映像を作成してもいいし、絵をかくたり、詩を創ったり、または歌や踊りで理解を表現してもいいといった具合です。確かに、評価基準は示されていますが、子どもが一人で評価基準を理解して、

先生の期待に沿ったものを準備するのはなかなか大変です。

このような話が娘の口から出てくると、私は父親として話を聞きつつも、どうしても研究者としての自分をおさえることが難しくなります。すると、娘たちはその微妙な変化を察して、すこし煙たげな顔をします。それでも、できるだけこれまでの会話の流れに沿った形で、「で、どちらのほうがいいと思う?」と聞いてみました。しばらく考えた後、「日本の方が勉強する上では楽だけど、勉強自体はつまらないかなー」と答えてくれました。続けて、もう一つ質問を挟み込もうとしましたが、あいにく、これ以上研究者のつまらない会話には付き合えないという感じで、部屋に逃げ込まれてしまいました。

日本の教育は、確かに面白味に欠けるのかもしれませんが、教育の平等という視点からすると、優れているとも言えます。教育内容と評価内容が直線的、明示的に結ばれているので、だれでも努力さえすればそれなりの成果を得られるようになっているからです。一方、オーストラリアの場合は、評価基準を「解読」して、教師が求めているものを察して提出物を準備することを求められますから、「解読力」の高い家庭に有利に働きます。こういう事情もあり、オーストラリアでは移民の子どもの通塾率が高いという研究結果もあります。つまり、同国の教育課程を経験したことのない親が、自らの「解読力」の欠如を、子どもを通塾させることで補うという解釈です。幸いにも、私たちはオーストラリアから日本に移動しましたので、通塾の必要は感じませんでした。このような感じで、日々の何気ない娘たちとの会話の中から、日本の学校について学びつつ、こっそり研究の糸口を探しています。ですが、娘たちが思春期を迎えるにつれて、徐々に父親を避け始めたのが目下の悩みどころではあります。

E.FORUMの取り組み

2022年度E.FORUMの取り組み

教育・人間科学講座 准教授
石井 英真

E.FORUMでは、昨年度に引き続き、オンラインでの研修を提供するとともに、3年ぶりに対面での研修も再開しました。

オンライン研修としては、6月から8月にかけて、「スクールリーダー育成のためのオンライン・リレー講座」を同時配信で開催しました(京大オリジナル株式会社との共催。講師は、楠見孝教授、西岡加名恵教授、西見奈子准教授、明地洋典准教授、石井が担当)。全5回の研修に、延べ248名の方がご参加くださいました。また、オンデマンド型のオンライン研修「教育評価の基礎講座」も配信しました(京大オリジナル株式会社との共催。京都大学高等教育研究開発推進センターのご協力を得て、KoALAにて提供)。これは昨年度に提供した内容の再配信ですが、今年度は110名の方が受講してくださいました。

対面研修としては、8月20日(土)に、吉田キャンパス総合研究2号館において「第17回実践交流会」を開催しました。コロナ禍により定員を制限しましたが、総勢33名(午前19名、午後33名)の教職員や教育委員会関係者の方々が参加してください、とても活気のある会となりました。午前の実践交流では、参加者の関心のあるテーマに沿って、グループ分けを行い、各自が持ち寄った実践資料をもとに交流を深めました。午後は、高山敬太教授による講演「気候変動の危機と日本の学校——道徳と国語を巡る議論を讀

み直す」を行いました。講演の後半では、質疑応答の時間を設け、フロアからさまざまな質問や感想が述べられ、議論を深めることができました。

その他の活動としては、休校期間中に在宅学習を進める子どもたち(や保護者・先生方)への支援を目的に2020年5月に開設した「子どもたち応援サイト」(https://e-forum.educ.kyoto-u.ac.jp/for_children/)も更新を続けています。

E.FORUMでは、できる限り多くの皆さまに参加していただけるよう工夫しつつ、引き続き実践に役立つ知見を得られる、楽しくて元気の出る研修を提供していきたいと考えております。今後ともご支援のほど、よろしくお願いいたします。

E.FORUMの活動については、<https://e-forum.educ.kyoto-u.ac.jp/>もご覧ください。

【第17回実践交流会】



「日本型」教育文化・知の継承支援モデル の構築と展開プロジェクト

教育認知心理学講座 教授
MANALO, Emmanuel

Edward Thorndike, the famous psychologist said more than 90 years ago, that “learning is connecting”. Learning begins at (or even before) birth. Even young children before starting formal education learn connections between a huge amount of new information in their daily lives at home and elsewhere. One of the earliest connections that the child needs to make is between its actions – for example, crying when hungry or wet – and appropriate responses from surrounding adults, especially its parents. Imagine therefore the negative consequences of the parent repeatedly ignoring the child. Instead of learning that its actions can lead to favorable outcomes, the child will likely learn instead that it has very little or no ability to elicit an effect on its environment. Even if it cries, it gets no attention, milk, hugs, or diaper change.

In a book chapter that Ai Mizokawa (Kyoto University Graduate School of Education’s alumna, and now Associate Professor at Nagoya University) and I wrote which will be published in a book that Professor Keita Takayama is editing, we explain the importance of establishing learning connections in the everyday lives of young children. We also describe examples of specific episodes that Dr Mizokawa had observed and written notes about when her first child was just over 3 years of age. One example was of a conversation between them upon returning home after visiting a music box museum where some of the music boxes on display required coins to be inserted before they played tunes. Her son asked why the music box moved after the coin had been inserted. Dr Mizokawa answered that the music box was designed to work only with coins, that it was originally used in restaurants and shops a long time ago and people inserted coins when they wanted to enjoy listening to beautiful music. Her son then asked, “How about dinosaurs?”, which she at first did not understand. Her son then elaborated by saying, “Dinosaurs in the world of dinosaurs. Did they move with coins?” To this, Dr Mizokawa answered, “Oh, you mean dinosaurs that lived a long time ago! All living things move without coins. So, real dinosaurs in the world of dinosaurs moved without coins. Look – you can see Mum is also moving without coins!” Her son then replied, “I move by inserting water (omizu) and food (gohan). I move by inserting water-coin (omizu-okane)!” In this episode, Dr Mizokawa’s son developed learning connections that enabled him to understand how music boxes, dinosaurs, and other living things (like humans) move. But he also went beyond that to grasping the connections in terms of similarities and differences between living things and non-living things. In effect, he was able to abstract the concept of “need for

fuel” for living and non-living things to work.

Learning is connecting, and it is essential for a young child to make as many of those connections to establish the foundations for learning in school and for life. A child however will struggle to do that alone: it needs a caring adult to stimulate and guide the formation of those learning connections. To facilitate the development of those crucial learning connections, it is important to foster the child’s curiosity. This is because children learn best when they are curious and interested in what they are learning. Simply telling the child “answers” from adults is not sufficient to promote learning connections. The focus should be on “learning”, not “teaching”, and it is essential to prepare the starting point of questioning. By speaking with the child even before the child learns to speak, the parent can draw the child’s attention to connections between sounds/words and what they represent or mean. By showing various objects and demonstrating actions to the child, the parent can lead the development of learning connections necessary to understand relationships, mechanisms, and procedures. It is also important to create an environment in which the child feels that he or she can ask any questions at any time without fear of making mistakes, especially after acquiring language. Then the child will discover connections in the world, step by step, at his or her own pace. Discovery itself is also a source of joy for the child.

Knowing about the opportunities that a parent has for facilitating important learning connections for their child, I feel somewhat sad when I observe a parent and a young child together but with little or no interaction at all. On such occasions, usually the parent focuses attention instead on a smart phone screen, largely ignoring the child who stares blankly as the world around passes by. So, if you are a parent with a young child, I suggest putting away that smart phone and paying more attention instead to our child. Talk, play, discover, and engage in various activities with him or her. You have the power to enhance not only your child’s learning now but also for the rest of his or her life! Sharing the child’s discoveries of connections will be a source of joy for us adults too!



令和4年度教育学研究科長賞

学生表彰選考委員会委員長・研究科長
楠見 孝

このたび、令和4年度京都大学大学院教育学研究科長賞ならびに教育学部長賞の選考の結果、教育学環専攻教育文化学コース修士課程2年の油田 優衣(ゆだ ゆい)さん、教育学環専攻教育認知心理学コース博士課程3年のAraya Orozco Claudia (アラヤ オロスコ クラウディア)さんが、受賞者に選ばれました。誠におめでとうございます。

この賞は2012年度に創設され、(1)学業、(2)課外活動、(3)社会活動などの分野で優れた成果を上げ本部局の名誉を高めた学生、(4)その他、本表彰に相応しいと認めた学生に対して賞を授与するものです。本研究科・学部の教職員および学生であればだれでも推薦することができます。自薦も可能となっています。

11回目を迎えた今年度は、推薦期日の2022年9月30日までに、計2名の推薦がありました。以下、選考経過と選考理由を簡単にご報告します。

まず、学生表彰選考委員会(委員は楠見 孝 研究科長、佐藤卓己 副研究科長、南部広孝 副研究科長、佐野真由子 教務委員長、松下姫歌 学生委員長)において、推薦を受けた候補者について慎重に協議・検討しました。その結果、油田さんとArayaさんを受賞にふさわしい成果を有すると判断し、それぞれ研究科長賞受賞者として決定しました。

油田優衣さんは、障害をもつ人々の経験について、研究者として学術研究を、当事者として実践的社会活動を行ってきました。障害をもつ人々の経験について、講演、テレビ出演、新聞記事掲載など、非常に多数の活動を行ってきました。例としては、2020年の設立当初から「一般社団法人

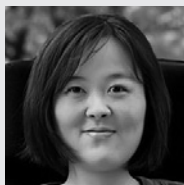
わをん」の「当事者の語りプロジェクト」編集長を務め、障害者当事者のインタビュー記事を掲載しています。2019年からは「筋ジス病棟の未来を考えるプロジェクト」に関わっています。これらの実践的活動には、京都大学大学院教育学研究科で学び、彼女自身が研究者として綿密に研究を行っていることがおおいに活用されており、社会活動の観点から本研究科の名誉を高めることに大いに貢献されました。

次に、Araya Orozco Claudiaさんは、経験がワーキングメモリの働きに及ぼす影響について関心を持ち、ヘップ反復効果という古典的現象を用いて、次々と新たな発見を報告してきました。その成果として、Arayaさんが第一著者となって発表した論文が、国際誌Memory & Cognitionに掲載されました。また、日本ワーキングメモリ学会第18回大会における口頭発表により、優秀発表賞を受賞し、京都大学教育学部同窓会(京友会)から、国際賞を授与されています。

さらに、オープンサイエンスを積極的に推進しており、自身の論文をオープンアクセス化するだけでなく、得られたデータと用いられた分析のためのスクリプトをOpen Science Frameworkのリポジトリに公開しています。以上のような学業成果と学術活動を通じて、学業の観点から本研究科の名誉を高めることに大いに貢献されました。お二人が今回の受賞を機に、今後ますますご活躍されますようお祈りいたします。



研究科長賞



修士課程2回生
油田 優衣

この度は、教育学研究科長賞という名誉ある賞を賜り、誠にありがとうございます。

私はこれまで障害者として生きるなかで、様々な差別や抑圧を経験してきました。日本では、普通学校に通うことも、大学に進学することも、一人暮らしをすることも、障害のある人にとっては「当たり前」に存在する選択肢ではありません。私が今こうして24時間の公的な介助サービスを受けながら一人暮らしをし、京都大学で学んでいるのは、様々な幸運が重なったからです。日本では今でも、障害があると、施設や病院、親元で生活せざるをえなかったり、人生の選択肢が大きく制限されたりすることがかなりあります。そして世間には、「生産性」のない人間にリソースを割くのは無駄だという価値観が深く存在しています。そんな社会が変わってほしい、障害のある人も地域で生き、権利をもつ一人の人間として扱われる社会になってほしい——それが私の活動の原動力です。

私のこの大学生活は「障害者が地域で生きる」ことの実践の一つの場です。私はこれからも、その実践の場から得たものを社会に還元し、社会が変わるために私ができることを、ぼちぼちと、そして、しぶとく続けていきたいと思えます。

研究科長賞



博士課程3回生
Araya Orozco Claudia

I am very honored to have been selected as the recipient of the Dean's award of the Graduate School of Education. I would like to take this opportunity to express my sincere gratitude and appreciation to everyone at the Graduate School; professors, administrative personnel, and graduate students for their support. But I would like to specially thank Saito Satoru-sensei who has always been a very dedicated and supportive supervisor.

My research goal is to examine the mechanisms and functions that underlie human memory, specifically, the relationship between working memory and long-term memory. To accomplish that, I have been studying Hebb repetition learning in memory tasks, which is the long-term learning that arises from the repetition of a sequence and has proven to be closely related to language acquisition. With my study, I aim to understand how learning through Hebb repetition occurs and whether it is specific to language learning or a generalized learning mechanism.

Receiving this award motivates me to continue working hard on my research, improving as a researcher every day and contributing as much as possible to our Graduate School and to the Cognitive Psychology field. Thank you very much.

オープンキャンパス2022

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、2022年度オープンキャンパスは、昨年度同様、インターネットを活用して実施しました。

楠見学部長のご挨拶、学部概要と特色入試のスライド説明、明和政子教授、高橋雄介准教授、服部憲児准教授による模擬講義、学生3名による「学部生からの応援メッセージ」の動画を2022年7月20日から2022年9月末まで特設サイトに掲載しました。

また、高校生に向けて、本学部・研究科の学生に質問や相談ができるオンライン相談会を実施しました。

京都大学
オープンキャンパス

教育学部
学部長挨拶
教育学部長 楠見 孝



2022年京都大学教育学部

オープンキャンパス

学部長挨拶

楠見 孝

大学院・学部学士入学 入試説明会

2022年6月25日(土)にオンライン(Zoom)上にて、大学院及び学部学士入学入試説明会(コース別相談会)が開催されました。

例年であれば京都大学吉田キャンパス及び京都大学東京オフィスにて開催されていますが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、今年度はオンライン(Zoom)上での開催となりました。

まず、佐野真由子教務委員長による入試ガイダンス(全体説明)を行い、その後のコース別個別相談会は、13時45分から15時25分まで実施しました。

コース別相談会では、担当教員、大学院生相談員の学生と受験希望者との間で意見交換等が行われ、いずれの相談会でも受験希望者が熱意を持って参加していました。



京都大学大学院教育学研究科・教育学部
Graduate School of Education Kyoto University (Faculty of Education)

大学院教育学研究科 ・教育学部学士入学 入試説明会

■ 入試ガイダンス(全体説明会)

1. 大学院について
2. 2023年度入学試験(大学院、学士入学)について
2022年6月25日 12時30分～13時30分
(リアルタイム配信)

■ コース別相談会

- 2022年6月25日 13時45分～15時25分
(リアルタイム配信)

主な出来事 (2022.4.1 ~ 2022.10.31)

- 4月22日(金) **高大連携**: 滋賀県立膳所高等学校
特別授業(前期) 総合・人間科学Aコース「多様性を理解するための個人差の心理学」
高橋雄介准教授
- 6月3日(金) **男女共同参画セミナー**
令和版・ジェンダー論～なぜ組織に多様性がもとめられるのか?～
講師: 羽生祥子(日経BP編集委員・日経XWOMAN創刊編集長)
国際科学イノベーション棟 5Fシンポジウムホール
- グローバル教育展開オフィス
ウェビナーシリーズ 2022 ダイバシティー時代の「日本型教育」の行方
6月17日(金) 第1回講演会 渡辺大輔准教授(埼玉大学基盤教育研究センター)
8月24日(水) 第2回講演会 三上純 博士課程後期(大阪大学大学院人間科学研究科)
9月22日(木) 第3回講演会 高橋史子 特任講師(東京大学教養学部)
- 教育実践・コラボレーションセンター E.FORUM
2022全国スクールリーダー育成研修 スクールリーダー育成のためのオンライン・リレー講座
6月19日(日) 第1回目 石井英真准教授
7月2日(土) 第2回目 西見奈子准教授
7月16日(土) 第3回目 明地洋典准教授
7月30日(土) 第4回目 楠見孝教授
8月6日(土) 第5回目 西岡加名恵教授
- 教育実践・コラボレーションセンター E.FORUM
オンラインコース「教育評価の基礎講座」2022
6月15日(水) 第1回・6月29日(水) 第2回
7月13日(水) 第3回・7月27日(水) 第4回
西岡加名恵 教授
8月10日(水) 第5回・8月24日(水) 第6回
石井英真 准教授
- 6月25日(土) **高大連携**: 雲雀丘学園高等学校(宝塚市)
One day college-出張講義「教育学とは何か: 教育と人間形成の不思議に迫る」
広瀬悠三准教授
- 7月24日(日) 附属臨床教育実践研究センター
第24回リカレント教育講座「『心の教育』を考えるー思春期とSNSー」
京都大学百周年時計台記念館
- 7月27日(水) **福岡県立筑紫丘高等学校【京都研修】の研究室訪問と講義**
講師: 佐藤卓己教授
吉田キャンパス
- 8月17日(水)～20日(土) **地域の魅力を伝えるフォトボイス「すわのいき」発表会と展示**
グローバル教育展開オフィス 安藤幸講師
諏訪市豊田の観光複合施設「SUWAガラスの里」
- 8月20日(土) 教育実践コラボレーション・センター E.FORUM
2022年度全国スクールリーダー育成研修「第17回実践交流会」
高山敬太教授講演会「気候変動の危機と日本の学校」
総合研究2号館
- 8月24日(水) 教育認知心理学講座
Klaus Oberauer教授講演会「The Theory Crisis in Psychology」
チューリッヒ大学Klaus Oberauer教授
教育学研究科第一講義室とwebinarsのハイブリッド方式
- 8月31日(水)～9月2日(金) **京都大学サマーデザインスクール2022**
総合研究8号館 および オンライン
- 9月7日(水) **高大連携**: 福岡県立京都高等学校(福岡県行橋市)
「第1学年課題研究セミナー」
服部憲児准教授
オンライン
- 10月13日(木) 14日(金) 教育実践コラボレーション・センター
令和4年度福岡県立京都高等学校「京都研修」
総合研究2号館
- 10月22日(土) 北京師範大学との交流
教育実践コラボレーション・センター学術交流活動
「Education Reforms in a Changing Society」
京都大学教育学研究科主催 オンライン
- 10月25日(火) **高大連携**: 樟蔭高等学校
大学受験に向けて志望校の決定や学習意欲向上を目的としたHR
グローバル教育展開オフィス 安藤幸講師
樟蔭高等学校 ICTルーム

人事異動 (2022.5.1-2022.10.31)

2022 (令和4)年6月1日 派遣職員 (教育・人間科学)	採用	2022 (令和4)年9月16日 事務補佐員 (教育認知心理学)	採用
2022 (令和4)年6月30日 派遣職員 (総務掛)	任期満了	2022 (令和4)年9月27日 FRIE, Roger Andreas 特別招へい教授 (客員教授) 事務補佐員 (教務掛)	受入 採用
2022 (令和4)年7月1日 西山 慧 研究員 (教育認知心理学)	採用	2022 (令和4)年9月30日 事務補佐員 (教務掛・教育認知心理学)	任期満了
岩井 律子 研究員 (教育認知心理学)	採用	教務補佐員 (教育・人間科学)	任期満了
事務補佐員 (総務掛)	採用		
事務補佐員 (教育研究関連)	採用		
派遣職員 (教育・人間科学)	任期満了		
2022 (令和4)年8月1日 事務補佐員 (教育・人間科学)	採用	2022 (令和4)年10月1日 松下 佳代 教授 (人間・教育科学) 高等教育研究開発推進センターより配置換	
2022 (令和4)年8月8日 派遣職員 (地域連携教育推進ユニット)	採用	田口 真奈 准教授 (教育認知心理学) 高等教育研究開発推進センターより配置換	
2022 (令和4)年9月13日 Lothar Wigger 特別招へい教授 (客員教授)	受入	佐藤 万知 准教授 (教育社会学) 高等教育研究開発推進センターより配置換	
		勝間 理沙 特定助教 (教育学研究科)	採用
		小林 敬 研究員 (教育認知心理学 (高等教育学))	採用
		教務補佐員 (教育社会学 (高等教育学))	採用
		事務補佐員 (人間・教育科学 (高等教育学))	採用
		事務補佐員 (教育認知心理学 (高等教育学))	採用

外部資金受入れ (2022.4.1~2022.9.30)

共同研究

研究題目	委託者	研究担当者
筆圧とストレスに関する研究	株式会社ワコム	野村 理朗
会社組織としての好奇心に関する共同研究	キュリアスキャピタル株式会社	楠見 孝
心と体のレジリエンスと腸内細菌叢に関する研究	国立大学法人大阪大学 株式会社サイキンソー	明和 政子

寄附金

研究題目	寄附者	研究担当者
「通信教育における学習意欲の加熱メカニズムに関する比較メディア論的研究」への助成	公益財団法人 電気通信普及財団	藤村 達也
卵を中心とする日本食習慣が乳幼児およびその母親の身体・精神機能に与える影響	一般財団法人旗影会	明和 政子
「情報分野における専修学校と専門職大学院大学の教育史に関する調査・研究」のため	京都情報大学院大学	田中 智子
石黒先生の教育認知心理学研究のため	吉岡 寿志	石黒 翔

受託研究

研究題目	委託者	研究担当者
音楽養育環境による乳幼児の内受容感覚発達メカニズム解明	国立研究開発法人 科学技術振興機構	明和 政子

諸報

新任教員紹介



勝間 理沙 特定助教
専門：子どもの攻撃性・向社会的性、
予防教育

これまで、「予防教育」という枠組みの中で、人の健康や適応の促進またはそれらを阻害する要因について基礎的、応用的な研究をしてきました。よろしくお願ひ申し上げます。

教育学研究科・教育学部基金

ご寄附いただきました方々への感謝の意を含め、
ここに芳名を掲載させていただきます。
(公開をご希望されない方については、掲載していません。)

廣瀬 直哉 森本 洋介

※50音順 ※2022年9月末現在

ー未来の教育を創造するため、人間・社会についての世界最先端の研究を展開し、 成果の社会還元を行うとともに、学生の教育環境の整備に取り組みますー

本研究科・学部は、1949年の創設以来、世界最先端の教育学研究とその研究者の養成、ならびに全学の教職教育の責任部局という責務を担いながら、これまで各界で活躍する有為な人材を輩出し、優れた研究成果を現場に還元することで社会の要請に応えてきました。

本研究科・学部は、学校教育はもとより、地域、家庭、職場など人が育っていくあらゆる場を「人間形成」の場として探究しています。その中で、不登校・学習意欲不振生徒のための学校改善、過疎地域の地域振興などへの提言、教育委員会の指導主事など第一線の実践現場で働く人びとにとっての研修の機会を提供しておりますが、このような活動は、大学院生が現場のリアルな問題に触れながら自らの研究関心と手法を研ぎすますための教育の場でもあります。

近年、社会と連携したこうした教育研究活動の必要性が増す状況において、本研究科・学部が社会と連携しながら実践的な教育・研究を行うためには、安定した財政基盤が必要です。

その礎の一つとして、2015年に「教育学研究科・教育学部基金」を設立しました。本基金では、研究の成果を現場（フィールド）に返し、また現場での課題を教育・研究に生かしていく、「理論と実践の往還型」の教育・研究という本研究科・学部の特色ある活動を維持するため、以下の活動に活用します。

皆さまのご協力をよろしくお願いします。

基金の使途：

項目	具体例
(1) 教育支援	・学生のための図書・教材等の購入 ・学生関係居室の整備・維持管理 ・障害学生等のための学習補助者の雇用 ・学生・院生の海外派遣 など
(2) 研究支援	・研究活動基盤整備の支援 ・研究・学術資料の整備 ・公開講座・講演会等の開催 など
(3) その他事業支援	・京都大学教育学研究科シリーズ本の出版補助 ・修了生・卒業生との連携活動 など

詳細については以下をご覧ください。

<http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/contribution/education/index.html>

編集後記

キャンパスでは11月祭そして教育学部祭が行われました。対面実施が含まれるのは3年ぶりです。この「3年ぶり」という語を今年はたくさん耳にしたように思います。祇園祭の山鉾巡行も3年ぶりに行われました。個人的には、3年ぶりに新幹線や飛行機に乗って移動をしました。人と会えることが当たり前だった時代がそれを有り難いとさえ感じさせる時代になりました。次のニューノーマルは私たちの何に变革を求めてくるのか。それがいかなるものであれ、柔軟に対応できるように、学生たちとともに心を知的に耕すことに精を出したいと思います。
(高橋雄介)

表紙によせて

2022年7月24日に百周年時計台記念館にて附属臨床教育実践研究センター主催リカレント教育講座を開催いたしました。今回は「思春期とSNS」を全体テーマに掲げ、午前にはSNSカウンセリングやインターネット依存等に関するご講演を拝聴し、午後には4つの分科会で事例研究を行いました。実に3年ぶりに対面での公開講座の開催が実現し、多くの参加者と共に教育現場における心の問題についてじっくり検討する機会となりました。
(田中康裕)

京都大学教育学研究科・ 教育学部広報委員会

事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛

委員長 明和 政子 教授(教育・人間科学講座)
委員 岡邊 健 教授(教育社会学講座)
委員 高橋 雄介 准教授(教育認知心理学講座)

ホームページ <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp>



2022年、京都大学は
創立125周年を迎えました。



ガイドドッグペーパー
当印刷物の用紙費用の一部は
関西盲導犬協会に寄付されています